

偶 感

落 井 良 昭

宗教は人類に於ける心理的現象なり、一切の顯動的宗教的現象は總て人類の心理的機能なり、是れ一に其機能を擔任する主体の外に其れが向ふ所の客体ありて始めて生ずる者なり。然れども此の機能を絶對的に宗教的特質を有すと稱すべからず、故に其然ると否とは客体の有無に非ず寧ろ如何なる種類の客体なるやにあり、理論的自覺幸福主義の如き主体自己を客体とせるは宗教的に非ず客体は主体に卓越し其卓越も人類的卓越に非ずして異等の本体に對する絶對の卓越ならざるべからず之を稱して宇宙的勢力或は神と稱す。而も理論的命名に非ず宗教的概念なり、宗教的機能とは實に人の神に對する交渉即關係の謂なり而して此の關係は意識的なるを要す、即ち人なる主体が意識的に神なる客体と交渉するに於て神の寫象なかるべからず。これなければ宗教なきなり是れ即ち宗教的機能の發足點たると共に同時に又要素なり、從て宗教的生活の實質なり、而してこの寫象の宗教的機能の前提には必ず過境的意義と價值とを有せざるべからず、即ち過境的意義に於て真理ならざるべからず、若し其寫象が單に含蓄的なる意識の内容に止まるとせんか理性は直ちに之に向て掃除すべければなり、何んと

なれば其過境的意義の宗教的空想にして批評的理性と相闘争し悟性之れが征服者となりて宗教的動機殄滅すべければなり、是宗教的關係の基として過境的意義の眞なるべきを要するものにして、先天的觀念論、論理的懷疑論の宗義は宗教を不可能ならしめ終に二重眼理に迷執すべけん而已、於此乎吾人は兩者の意義に對する範圍は理論的意識は宗教的意識の要せざる材料をも含有し又前者が其經驗材料の十分ならざる爲め飯納の明斷し得ざる者をも后者は希望的憧憬をなして雲霧中に闡入すべし、これ兩者は其核實一致せざるべからず、又互に交渉せざる部分に於ても此共通の核實を普く事あるべからざるなり。故に后者が其最高度に達し前者が決して迷誤にあらざるを許すに於て、初めて合一し茲に前者は前者以外に至らざるに至り、從て宗教的世界觀は理論的世界觀より別に標置するを要せず。后者は前者の心理的事實より飯納して強固なるを得ん。而して宗教の如何を問はず其盛時に於ては即ち其國民の理論的世界觀と投合せしものなり。換言せば宗教の創確は必らず其國民當時の理論的世界觀と結合せしものなり。然れども其周圍に適應して送化發展せんとするには勢ひ新要素の要求を來たし必然的に自由討究の健全なる知力の助を借らざるべからず、而れども宗教(殊に宗教家)は一切の文化の進歩及知力の進化は其始は健全なるが如きも、終には忌むべき結果を呈すとなし、精神發達上に少なからざる病的流行性を撒布するものとして自家の妄見を脱せざるが如し。然りと雖も是の衝突は幾許の時間

を經由して後決せらるべきものにして、即ち宗教が其信徒に満足を與へ又永く感情に使はれし宗教的理性的判斷は其羈絆に甘んじ、科學的確證と自家宗教の設定との争は忽ち詭辨的通路を求め來たりて、宗教内部の力は進取的世界觀の明白なる證明に會ひ、其嬰守的てふ推斷中に没せらるゝに至り。例せば太古人民の神話的世界觀は當時に於ける合理的宗教需要に出でたるも現今此を一科學として研究するのみなるが如し。これ時代の問題は幾何の時を経れば文化の指導たる小數が、終に文化の上に幾世紀も遅れたる大多數を服し得べきに飯して止まん而已。而るに現在宗教の代表者(舊思想家)が多數の信仰尙は動かざるを以て自家の破るべからざるを主張するも、何等を證するの力なくして識者の笑を招くは寧ろ愚と云ふべきか??於此吾人は云はん、現在宗教の代表者所謂舊思想家は自己程度の宗教を以て絶對無上の宗教なりと信するが故なりと。いはゞ歴史的過程を公明に觀取するの能力無き者なり。從て宗教的世界觀との離反を求め科學を恐れて一も二もなく無限なり絶對なり不可思議てふ語の下に神秘的にして宗教を評價せんとせり。余は聊か彼等古僧輩に告げんとす、理論的世界と及科學の進歩は一宗教をして圓滿ならしめんとするのみならず、又終には從來の不満足を轉すべき一路を教ゆるものなり。其の不満足を感じるは其宗教に取りては一時苦痛に似たるが如きも將來躍進の原動力はこれに基せりと云ふべきなり、媒介神學の如きは實に此の苦痛を嫌忌して新酒を古瓶に注ぐが如き懂着をなし彼が

與へんとせし活生命は變じて破滅の聲となり、進化的宗教の發展を阻害するものと云はざるべからず。蓋しこれ周圍が(諸科學)之を屈服せしむるに非ずして科學が宗教に手を借して其れが新世界觀に進むべきを助け常に宗教の兩友として其照管的贊助として存在すべきに反せるを以てなり。更言せば現代の舊思想家輩は宗教なるものを一々の形態に通じたる普般の性質に於て見る事をなさずして其一定の現象形態のみに觀察を下せばなり。斯く云はゞ彼等は目して宗教の第一義諦を、全然理論的判斷の型に乗せ一々これを分拆細論せんとするものなるべし。然れども余もとより狂漢に非らず、宗教の義諦が絶對無限にして不定文字的なるは元より知悉せる所、而も其無限絶對に達する吾人の指導的説明に於て合理的を要求して止まざるものなり。若し斯事にして出來得べからずとせば、其の宗教的信仰を惹起せんには過境的に眞理たらざるべからず、元より宗教的世界觀等は思想の動搖に從て時代に適應すべきものなれば、數理的眞理の絶對を要せずと雖も少なくとも正確なる實質科學の確定したるが如き、正確に近き蓋然を要するものなり。即ち抽象的絶對眞理ならずとも人生實行上蓋然さえ處に於て眞實に近き人生には影響なく行爲を支配する上に於て絶對的眞理と同じき價值あるを要するなり。過渡時代に於ける宗教家の主とする所は寛容なく自家のみにて完成し歴史的、發達上諸の關係に適應せざる宗教的世界觀は固定的にして其一部を代へんと欲せば、全部を破壊せざるべからざるに至る故に一定

不變の宗教觀を主觀的並に客觀的に信する、宗教的材能に支障を生じ已に反せる信仰は非宗教にして非宗教的行爲を生むものとし。斯の人をして漸次擴充すべき宗教的範圍を反比例的に狹隘ならしむるの傾向となりて、其の勢力極めて薄弱なるに至る。斯く縷述し來れば現代宗教の將來人心を化道する上に就て不満足なる結論を呈すべきは明白なる事に非ずと雖も、其の宗教なる第一原理に至りては吾人の問ふべくも非ざる所なり。只此れに達する手段の不合理的にして餘りに神秘的なるの嫌ひあるは全く宗教の價値を墮落せしむるものなり。要するに從來何れの遍願をも退け寫象と感情の獨立的價値を承認し而も意志のこれより貴重なるを知る。宗教的道德主義は實に最も眞實最も高尚なる宗教的現象なりと云ふべし畢竟するに科學を失段としこれによりて合理的に或る程度迄説明し得べき非神秘的（迷信に反せる）宗教即ち合理的信仰に安んじ合理的安心を得らるべき宗教を望むや切、翼くば過渡時代に於ける舊思想家よ少しく猛省するところありて可也。

—(完)—

昭和八年仲夏

祖山學院厚德寮北寮十一號室にて